

平成21年度
入学試験問題

国 語

2月5日 午前

受験番号	氏 名

中村中学校

一 次の(1)～(10)の——線のカタカナは漢字に直し、漢字はその

読みを答えなさい。

- (1) 作品のヒヒヨウをする。
- (2) 彼はなかなか目がコ^{かれ}えている。
- (3) 学校のカガイ活動。
- (4) 機械をドウニユウする。
- (5) 栄養がタリない。
- (6) 多くの人に親しまれている。
- (7) 大変な損害をこうむった。
- (8) 往來で大きな声を出す。
- (9) 直ちに行動をおこす。
- (10) 立派な尾を持つ馬。

二 次の(1)～(5)の——部分に共通してあてはまる部首名をそれぞれ

例例にならってひらがなで答えなさい。

- | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----------------|
| | | | | (1) | 例・ |
| | | | | ■每 | ■寺 |
| | | | (2) | ■官 | ■売 |
| | | | | ■由 | ■己 |
| | | | | ■寺 | ■十 |
| | | | | ■即 | ■吾
(答え・ごんべん) |
| | | | | ■相 | |
| (5) | (4) | (3) | | | |
| ■垂 | ■工 | ■立 | | | |
| ■田 | ■及 | ■山 | | | |
| ■亡 | ■吉 | ■士 | | | |
| ■中 | ■冬 | ■反 | | | |
| ■今 | ■会 | ■主 | | | |

それは「恥をかかせたりして、傷つけたら、いつでも爆発してやる」と無意識のうちに考える日本人の大量生産、という結果です。言いかえると、「自分はばかにされていないか」とつねに気にする日本人の大量発生です。

日本は「恥の文化」だと言われます。社会学の世界では、ほんとうにそうかどうか、さまざまなむずかしい議論がなされてきています。ここではそういう高度な学問的議論はおくとして、多くの日本人はじっさいに、恥をかかないためにいろいろ苦勞しながら行動していると言ってまちがいないでしょう。

「恥の文化」を指摘したルース・ベネディクトの『菊と刀』にあるように、1 恥を重んじたのは武士たちでした。

※ 予防的やさしさを実践する現代日本人は、「恥をぜったいかさたくない」「恥をかかせてはいけない」と強く考える点で、気位だけは武士みみたいな存在です。

江戸時代の身分制の頂点にあった武士階級は、その内部にもままたかい身分の違いがありました。ですから、身分の違いによる敬語の使用いわけにも、たいへん気を遣ったのです。

それにたいして現代日本人は、身分の差はないことになりました。だから、敬語の使用もそれほどやかましくは言われません。ただしそれは、ことばづかに気を遣わなくてもよいということではあり

55

50

45

40

ません。2、ちょっとしたことば遣いの違いで「恥をかかせられた！」と怒ります。その点だけが、武士並みなのです。

3、電車が混んできたので、近くの乗客に「奥に少しつめてください」とお願いされただけで、その乗客にたいして「ムカつく」「ひとはいくらでもいます。注意する・注意されるとい上下の差ができてしまい、注意されたひとは一段下におかれた感じがして「ばかにされた！ 恥をかかされた！」と怒るのでしょう。

もうひとつエピソードを紹介します。先日、NHK教育テレビで「ワタシのみたニッポン」という番組をみました(二〇〇七年六月一七日放送)。日本に留学にきている外国人たちが、日本社会や日本人についてスピーチするのです。そのなかのひとり、アメリカ・カリフォルニア州出身で、京都の大学に日本文化を学びにきている二二歳の男性は、こう言いました。「アメリカ人は親しさを伝えるためにあいさつします。でも、日本人は尊敬をあらわすためにあいさつしているように感じます」と。

4 アメリカ人のあいさつにも敬意の意味はあるでしょう。^③ けれども、日本人のほうが、あいさつに尊敬の意味あいをこめる程度は強いと推測されます。

尊敬していることが伝わるようにあいさつしないと、怒りだすよくな雰囲気(ふんいき)が、たしかにあるようにわたしも感じます。それほどま

75

70

65

60

でに現代日本人は、相手のあいさつの仕方をこまかく観察して、自分をばかにしていないかどうかを判断しているのです。

先程も述べましたが、いまの日本人は、身分差のない武士的存在です。みんな平等にもっともエライひと、なのです。

武士はちよつとした礼儀上のミスでも「無礼者！」とはげしく怒り、ミスをした家臣や町人を手討ちにします。相手は自分をばかにした！”と言って、斬り殺すわけです。とてもこわい存在ですね。だから、家臣や町人は「腫れもの」や「爆発物」をあつかうかのよ
うに、慎重でなければならなかったでしょう。

これは身分制があった時代のことです。いまは、対等が原則です。しかし、この対等を守らなければ、かつての武士のように怒りだす、こわいひとが増えたのです。

身分制の時代は、武士にたいしてだけ気をつけていけば大丈夫④
でした。一方、民主主義の現代、全員が武士的存在となってしまう結果、おたがいを「腫れもの」「爆発物」としてあつかい、対等性の原則を何としても守らないといけなくなったのです。

念のために断っておきますと、これは、民主主義のせいだと言いたいわけではありません。日本人の人生が自己目的化したからだ、わたしは考えています。

(森真一『ほんとはこわい「やさしい社会」』)

95

※ニート……若年の無業者。労働者・失業者・主婦・学生のいず
れにもあてはまらない若者。

※臨床……実際に病人を診察・治療すること。

※ルース・ベネディクト……(一八八七〜一九四八)アメリカの文

化人類学者。

※予防的やさしさ……相手を傷つけないようにするやさしさ。

85

問一 〓線 a、b の意味をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a うかつに

- ア、そっと
- イ、むりやり
- ウ、うっかり
- エ、わざと

b こわだかに

- ア、こわそうに
- イ、大きな声で
- ウ、もつともらしく
- エ、堂々と

問二 〓線 ①とありますが、波平の態度として明らかに適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、後悔こうかい
- イ、臆病おくびょう
- ウ、心配
- エ、遠慮えんりよ

問三 〓線 ②とありますが、親がどのようになったというので

すか。七十字以内で説明しなさい。

問四 に入る言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、子どもを甘やかあまかしてしまつたら
- イ、「波平」のようにならなければ
- ウ、子どものこころを傷つけたら
- エ、ひきこもりやニートになつたら

問五

にあてはまる言葉を次からそれぞれ

れ選び、記号で答えなさい。

- ア、おそらく
- イ、たとえば
- ウ、かつて
- エ、むしろ

問六

〓線 ③とありますが、なぜ日本人はあいさつに尊敬の意味あいを強くこめるのですか。これより前の文中から「くため。」につながるように四十字でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問七

〓線 ④をわかりやすく言いかえている言葉を、本文中から十五字でぬき出しなさい。

問八 次のうち、本文の内容と合っているものには○を、合っていないものには×を解答らんに入しなさい。

ア、多発している少年犯罪を防ぐためにも、「波平」のように

子どもを大切に育てることが必要である。

イ、慎重に子育てをする日本人の親たちが増えたのは心理学に
よるところが大きい。

ウ、現代日本人は「身分差のない武士」なので、子どもの頃か
ら「腫れもの」にふれるように接するのがよい。

エ、現代日本人は「身分差のない武士」なので、お互い恥をか
かせないよう注意深くしているのが実状である。

オ、アメリカ人とは異なり、日本人はあいさつする時、自分か
ら親しみをこめるようなことはしない。

四 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を改変・省略したところがあります。)

*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

母親とけんかをした「私」とその弟のテツは、「猫捨場」になっている川原のガラクタ置場の、こわれたバスの中で泊まることに決めた。二人の居場所を知り、毛布を持ってやってきた祖父は、そのまま二人といっしょにバスの中で横になった。

弟のテツは眠ってしまい、祖父は「私」に、昔、大切な運動靴を学校で盗まれた時の話を始めた。犯人に心当たりがあった祖父は、証拠もなく、同じ組の「タカシ」が盗んだと明言してしまった。

いつもみんなをばかにしているような顔をして、自分からは決して声をかけてこない「タカシ」は、級友達からきらわれていたため、みんな、祖父の言うことを信じた。しかしその後、「タカシ」は学校に来なくなってしまった。

「そのときの担任の先生がね、おじいちゃんを呼びだした。その子はタカシっていったんだが、おじいちゃんにタカシの家に行って学校に来るように言えって言うんだ。おまえのせいでタカシは学校に来なくなったんだぞって。おじいちゃんは、ちょっと良心

が いたときだっただけに、こっちが悪者あつかいされて、

よけい腹が立ったよ。先生があんなみすばらしくて、勉強もできない

い子の肩を持つんだと思うと、それもくやしかった。だけど行った

んだ。その日、学校が終わってからタカシの家に。やっぱり先生の言うことは正しいと思ったからね。

①「ひどいもんだったなあ、あの家は。実はさっきここに来たとき、

おじいちゃんはふいにタカシのことを思い出してね。なぜだろうって思ったんだが……わかったよ、あの家を思い出したんだ。タカシの家も川原にぼつんと建ってて……しかしあれは家なんてもんじゃなかった。板切れとぼろ布を寄せ集めて、風に飛ばされないように石でおさえただけみたいなんだった。たれさがったムシロをめぐって『タカシくん、おられますか』って声をかけたら、ぼろを着て、

15

なんだかだるそうにごろごろしている小さい子たちといっしょに、病気だったんだろ、横になってたおかあさんらしい女の人起きあがろうとして、それをかばうみたいにおこった顔をしたあいつが立ちあがった。びっくりして見てたおじいちゃんを、タカシは小突くようにして外に追いだすと、『なんね』とにらみつけた。その声には耳慣れないなまりがあって、タカシがあんまり口をきかなかつたのは、そのせいだったのかもしれない。だけどおじいちゃんは

20

のことに、そのとき初めて気づいたんだ」
おじいちゃんは口をつぐむと、寝ているテツを起こさないように、
のどの奥で押し殺したような咳をした。

25

「のどあめもうひとつ、出そうか」

「いや、けっこう」

「おじいちゃん、その子にあやまったの」

ああ、と言った拍子ひょうしに、おじいちゃんは大きく咳きこんだ。うー
ん、とテツが身動きする。おじいちゃんはテツの首もとの毛布を直
してやりながら、また話しだす。

「あやまった。学校に來い、先生も待ってるからって言った。タカ
シはおじいちゃんをじっと見てる。もうこれでいいんだな、とおじ
いちゃんは思ったんだが、そうじゃなかった。あやまるなら、ちゃ
んとあやまれて言うんだ。両手をついて、あやまれて。この野
郎ろう、と思ったけれど、頭の中に先生の顔が浮かんだから、言われる
ままにしたよ。川原の石の上に正座して『申しわけありませんでし
た』って。もっと大声で言え、なんて言うあいつの顔を見ると、目
が油をひいたばかりのノミ※の先みたいだね。」

I

40

「そのとき、ムシロの奥からタカシの妹が出てきたんだ。まだ五つ
くらいの子だったけど、おそろしく痩やせてた。顔も体つきも、ふつ
うの人間じゃないみたい。うすっぺらい感じなんだ。それでも目
はまんまるで、地べたにすわりこんでるおじいちゃんを見て、『にちゃ
んのお友だち』なんて言ってにこにこしてる。かわいい子だな、と
おじいちゃんは思ったんだが、その子を振り返ひったタカシのようす
がへんだった。それでおじいちゃんは気づいたんだ。その子はぶか

45

ぶかの運動靴を履はいてるじゃないか。爪先つまさきがエンジ色のゴムの運動
靴を、その子が履いてたんだ」

「おじいちゃんの」

「そう」おじいちゃんはちょっとため息をついた。「タバコを吸っ
てもいいかな」

「どうぞ」そんなことをきかれたのは初めてなので、どぎまぎして
しまう。

おじいちゃんは、少し体を起こして毛布から両腕りょううでを出すと、セー
ターの下のシャツのポケットからとりだしたタバコを、じれったく
なるくらいゆっくり吸った。話はそこで途切とぎれてしまったかのよう
だった。火がぼうつと明るくなっておじいちゃんの角張った指を照
らし、煙けむりがひろがっていく。ごそごそ音がして、前のほうにいた
猫が一匹ひき、バスの外へ出ていった。タバコの煙がきらいなのかもしれ
ない。

「それで、どうしたの」

II

、私はきいた。座席の後ろについている灰
皿を使って、おじいちゃんはいねいに火をもみ消した。吸殻すいがらを捨
てると灰皿をきちっと閉め、両手をまた毛布の中に入れる。

65

「おじいちゃんは最初、運動靴しか目に入らなかつたんだ。だから
その女の子につかみかかって運動靴をぬがせようとしたんだが、も

のすごいいやがりようでね。こんな細い子がどうしてってくらい、カメみたいに強情に体をこう、まるめてた。それでも無理にぬがせようとする、今度はやみくもにけりあげてくる。おじいちゃんはかっとして、その子をぶった。タカシはおじいちゃんの背中にしがみついて、『やめろ、やめろ』って叫んでる。ちくしょう、どろぼうは自分じゃないか。人に土下座なんかさせて、きたないのはそっちじゃないか……おじいちゃんはものすごくおこった。だけど」

④ おじいちゃんはまたひとりで、うんうん、とうなずいた。止まっ
てしまいそうな自分の口を、はげますみたいに。

75

「だけど、おじいちゃんはそのとき、その小さい女の子ばかりをせめたんだ。やるんならタカシだ。それなのに、タカシには見向きもしないで妹をぶった。どうしてだか、わかるか」

「その子が、運動靴を履いてたから？」

80

ちがう、とおじいちゃんは言った。

「おじいちゃんには、わかったんだ。」

III

おじいちゃんはじっと私を見た。

「だからその女の子を、ぶった。ぶっただけじゃない。『おまえの
にいちゃんはどろぼうだ！』って何度も叫んだ。タカシの『やめろ、
やめろ』って声がだんだん泣き声になって、女の子はきゆうに足を
バタバタさせるのをやめると言ったんだ。『ほんとなの、にいちゃ

85

ん』って。タカシが泣いたのを見たのは、あれが最初で最後だった。その後、あいつは学校に来ないままだったからね。

「あんな後味の悪いことはなかった。なんにも知らない、小さい妹を痛めつけたりして。なぐるならタカシをなぐればよかったんだ。たかが運動靴のために、自分があんなに卑怯ひきょうになれるなんて思ってもみなかったよ」

おじいちゃんはまた黙だまりこんでしまう。

「運動靴は……」

「取り返したよ」

95

履けるわけがない、とでもいうように、おじいちゃんは首を振った。⑤「ずっと下駄箱けたばこの奥に入れたままで、ある日、思いたって川に捨てにいった」

川の水に、運動靴の落ちる音が私の耳にも聞こえた。

100

「あんなことは二度とするまい、持ってるもので争うくらいなら何も持たずにいるんにかまわない、おじいちゃんはあるからずっと、そういうふうにはやってきたんだ」

私は何も言えず、ただ体を固くしていた。

(湯本香樹実『春のオルガン』)

※ムシロ……わらや竹などの植物を編んで作った敷物。^{しきもの}

※ノミ……刃と柄からなり、柄の頭をたいて木や石に穴を掘った^ほり溝をつけたりする工具。

問一 に入る言葉として適当なものを次から一つ選び、記

号で答えなさい。

ア、痛んで イ、ゆるんで ウ、進んで エ、さけんで

問二 —— 線①で使われている表現技法として適当なものを次か

ら一つ選び、記号で答えなさい。

ア、擬人法 イ、体言止め ウ、倒置法 エ、対句

問三 —— 線②「そのこと」は具体的にどのようなことですか。

四十字以内で説明しなさい。

問四 I に入る文を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、うしろめたかったのか、おどおどしている感じだった。

イ、なぜか、いまにも笑い出しそうな感じだった。

ウ、あやまるのが何だかばからしくなるような感じだった。

エ、逆らったりなんか、とてもできない感じだった。

問五 ——— 線③について、この時の「タカシ」の様子を次のよう

に説明しました。 、 にあてはまる内

容をそれぞれ二十字以内で答えなさい。

ので、 ことを恐^{おそ}れる様子。

問六 に入る言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、少しなげやりになって

イ、がまんできなくなつて

ウ、眠くてたまらなかつたが

エ、うんざりとしながら

問七 ——— 線④とありますが、この時の「おじいちゃん」の気持

ちはどのようなものであったと考えられますか。最も適当な

ものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、自分のその後の行動を話すことにためらいを感じつつも、

話さなければならぬと思う気持ち。

イ、遠い昔の話であるため、なかなか思い出せず口も止まりが

ちだが、何とか話そうと思う気持ち。

ウ、心ないことをした当時の自分を、自分自身全く理解できず、

これ以上話したくないと思う気持ち。

エ、熱心に聞いている「私」を前に、もうこれ以上話したくな

いとほさすがに言い出せず、困っている気持ち。

問八

Ⅲ

に入る一文を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、もっとこの子をぶてば、いやになって運動靴を手ばなすだ
ろうってね

イ、代わりにこの子をぶてば、自分のうつぶんも晴れるという
ことがね

ウ、タカシをやっつけるには、この子を痛めつけるほうがきく
んだってね

エ、タカシは自分の罪を認めず、きっとこの子のせいにするだ
ろうとね

問九

——線⑤とありますが、「おじいちゃん」は、なぜ取り返

した運動靴を履かずに捨ててしまったのですか。三十五字以

内で説明しなさい。